

# 野尋禾の ついのべ その一

(2009/08 - 2009/09)



転落



# まえがき

……と、以上が、ヒラギノ明朝 Pro W6の最大サイズです。以下はサイズ3で――

この電子書籍は、私こと野尋禾 (@nohironogi)が、ツイッター上で発表したついのべ（ツイッター小説）の、2009年8月と9月ぶんをまとめたものです。

私のサイトにも再録したPDFが置いてありますが、そちらは、ツイッターにアップしたものをほとんど加工せずに掲載しています。

誤字などを修正した箇所はありますが、ほぼそのままです。

今回は、改行を加え、より読みやすく加工してみました。

それ以外の工夫はありません。

できれば、縦書きにしたかったのですが、パブーさんの仕様では対応していないとのことなので断念しました。

もし、今後、仕様が改良されることがあれば、変更する可能性もあります。

収録作品については、なにぶん、手探り状態で書いていた作品ばかりなので、赤面するほかありません。

ということで、無料公開とさせていただきます。

ねがわくば、少しでも、あなたの暇が潰せますように……

2010/07/25(Sun)

野尋禾

2009/08

---

#twnovel\_

140文字で何ができるか？ なんだってできるさ。

一日を描ききることもできるし、一生だって、一族の記録、国家の興亡、生命の歴史だって。つまりね、140文字も140枚も140万枚も同じなんだ。読者さえいれば、なんだって書けるんだ。どう、読んでくれる？

2009/08/27

2009/09

---

#twnovel

汗まみれで帰ると、秋刀魚を焼く香りが出迎えてくれた。  
メタボ検診にひっかかってから始めたジョギングだが、あまり成果はない。  
無駄なんじゃないかな、と漏らすと、妻いわく、秋刀魚を見習え。  
食べて出すまで三〇分、だそうなの。  
悪気はないのだろうが、たとえとしてどうなんだ？

2009/09

#twnovel

その人は、車窓にビデオカメラを向けていた。  
日比谷線の車中だ。  
地上に出るあたりではないので、窓の外は暗い壁が続く。  
背筋が寒くなり、目をそらした。  
その後、その映像が”世界の車窓から”のテーマつきで YouTube に投稿されたのを発見した。  
が、面白さがわからなかった。

2009/09/08

#twnovel

どうせなら、山で死のう。  
生まれて初めて軽装で入山し、酒を呑みながら歩いた。  
すぐに迷った。  
すると、仙人じみた老人が現れた。  
老人は黙って杖を手渡すと、煙のように消えた。  
杖を手にした私は、足元に私の身体を発見した。  
私は私をやめて、山の何かになったらしい。

2009/09/20

#twnovels

なんでもデジタル化され、安易に複製されて、無料で出回る時代が来た。  
市場経済、貨幣経済は崩壊の危機を迎える。  
そんなとき、ふざけた誰かが、商品の価値を魂の量で表記した。  
すると、本当にそれが支払われるようになった。  
すでに、魂もデジタル化されていたのだった。

2009/09/20

#twnovel

また秋が来て、何かが変わる。  
夏の間、夢中だったものが、どうでもよくなる。  
海に行こうなんて思わなくなるし、冷たいものも欲しくなくなる。  
つるむ仲間が変わるのも、自然なことだと思っていた。  
でも、誰でも同じってわけじゃないらしい。  
毎年、誰かに心変わりをなじられる。

2009/09/20

#twnovel

常備薬のごとく、職場にお菓子を配達するサービスがある。  
日中、よく見かけるところを見ると、繁盛しているようだ。  
わがことのように嬉しい。  
かくいう私もご同業だが、ニッチを荒らしあう関係ではない。  
私の配達は夜更け、残業中のオフィスへ。  
お届けものは、まあ、いろいろ.....

2009/09/24

#twnovel

新国交相の M 氏は、中止するダム建設現場を視察に来た。  
ひどい山奥の村だった。  
住人は、なぜか老婆と女子高生だけ。  
なぜか、みな色黒で髪がぼさぼさ。  
大臣秘書官が携帯電話の緊急連絡を受け、大臣に耳打ちした。  
「すみません。間違えました。ここは、ヤマンバ村です」

2009/09/27

#twnovel

「おじさん、石焼芋ふたつ」  
「あいよ。こっちが”意志”、こっちが”奇異”。まちがえないでね」  
「イシちゃんとキイちゃんか。なんだか、でぶキャラとロボッ娘みたい」  
「お客さん、面白いこと言うね。一本おまけだ」  
「ありがとう、この子の名前は？」  
「それは、芋」  
「それは？」

2009/09/29

初めてイ本を売ったのは十歳のとき。

場所は、東京湾岸某所(特定すると年齢がバレる)。

そこでは、夥しい数の不埒な輩が集まる大きな祭りが開かれていた。

奴らは私のイ本を眺め、弄び、気に入れば買い求めていった。

それが私のコミケ・デビュー。

イ本とは”イタイ内容の本”の略だ。